やすいの木

空一面に、真っ黒な雲が広がり、辺りがうす暗くなったかと思うと、とつぜん、ドン、ガラガラ、ドドドドドーン！

かみなりが、とどろきわたりました。しめり気をふくんだ風が、さあっとふきつけてきます。

近くで畑仕事をしていた人たちが、大あわてで、「やすいの木」の下に、かけこんできました。

野山で遊んでいた鳥たちも、ピィー、ピィー、チーチー、チチチチと、よびあいながら、次々に、木の中にもぐりこんできます。二百も、三百も。いや、もっとたくさんの鳥たちが、まるで、すいこまれるように、にげこんでくるのです。

間もなく、たきのようなはげしい雨がザザザーッ、ゴゴーッと、おそってきました。

かみなりは、頭の上に来て、

バシッ、バシッ、ドドドドーン！

耳をつんざく、ものすごい音とともに、青白い光が、ビビビビッ……と、はじけます。

木の下ににげこんだ、おとなも、子どもも、通りがかりの旅人も、みんな、耳をおさえたり、目をつむったり、木のみきにしがみついたりしながら、あらしのすぎ去るのを待っています。

木のえだの鳥たちも、声をひそめて、ふるえているようです。

やがて、辺りが明るくなり、雨も小ぶりになりました。かみなりも、東の空へ遠ざかっていきました。

「やれやれ、助かった。おまえさんのおかげで、ぬれずにすんだわい。ありがとう。」

「本当にたのもしい木だよ。この木には一度もかみなりさんが落ちたことがないのだから、ふしぎな木だなあ。」

ポンポンと木のみきをたたいたり、なでたりして、「やすいの木」と話をしてから、人々は、また、仕事にもどります。

鳥たちも、木のふところから飛び立ち、うれしそうにさえずりながら、雨上がりの野山へ、散っていきました。

「やすいの木」は、遠くからながめると、まるで、大きなかさを広げたようでした。おとな四人が手をつないで囲んでもとどかないほどの太いみきが、どっかりと根をはり、四方八方にのびたえだは、いくえにも重なって、一年中、青々と葉をしげらせています。

夏は、すずしい木かげをつくり、寒い冬には、ふきつける北風をさえぎって、あたたかい日だまりをつくってくれます。

近くでのら仕事をするお母さんは、赤んぼうをかごに入れて、そっと、木の下にねかせておきます。

子どもたちは、一日中、この木の周りで遊びます。

この「やすいの木」から殿様街道をこえて北の方へ行くと、「御留林（おとめばやし）」という、村人たちには、立ち入り禁止の森がありました。

この森には、名古屋のお城のとの様が、家来をしたがえて、たびたび、たかがりにやって来ます。

いつものように、「やすいの木」の下に馬を止めたとの様は、ごじまんのたかに、今日こそは、えものをとらせようと、

「ホー、ホッ、ホッ。」

と、かけ声をかけて、勢いよく空にはばたかせます。

ところが、たかは、辺りをひと回りすると、「やすいの木」のてっぺんにとまり、きょろきょろと見回しているばかりで、いっこうに、えものを追いかけようとはしません。

見上げると、木のしげみの中には、なんと、何百という鳥たちが、ひっそりと、息をひそめてかくれているではありませんか。たかがりの行列が近づくと、「やすいの木」は、鳥たちをそっとよび集めるのでしょうか。野山には、一羽の小鳥も、残ってはいないのです。

ところが、たかは、木の中の鳥に目を向けようともしません。

あまりのふがいなさに、はらを立てたとの様が大声でよぶと、たかは、すうっと、どこへともなく飛んでいってしまいました。

「またか！この木は、どうしたことじゃ。ここでは、たかがりが、できぬではないか。」

にがりきった顔のとの様は、あきらめて、東の「御狩場（おかりば）」の方へ、行列を進めていきました。

こうして、村人たちも鳥たちも、「やすいの木」をたよりにして、なかよく、平和にくらしていたということです。